2季連続勝ち点奪取へ

〒602-8580　京都市上京区新町上立売西入ル西大路町
TEL075-251-3185　©同志社大学体育会機関紙
Doshisha Sports アトム
令和５年（2023）　硬式野球号
05/17 水曜日
http://doshisha-atom.net/
発行人　飯田要次郎
編集人　丸山潤一郎

超克
超えて越えて頂へ

一塁へ走り出す釜范
【切り込み写真】
指示を出す
（撮影・丸山潤一郎）

◆春季リーグ順位表◆

順	大学名	勝点	勝	負	勝率
①	関大	4	8	3	0.727
②	立命大	3	7	2	0.778
③	近大	3	6	4	0.600
④	関学大	2	5	7	0.417
⑤	同志社	1	5	6	0.455
⑥	京大	0	1	10	0.091

◆釜范大司
（かまやち・たいし）
2001年10月10日生まれ。北海道・札幌大谷高校出身。ポジションは内野手。右投げ左打ち。171㌢・70㌔。経済学部4年。

同志社アトム

硬式野球部

継承

釜范組

投打で宿敵圧倒せよ

2・3面 選手紹介
4面 回顧録
5面 結果面
6面 生島峰至氏へ特別インタビュー

超克 DOSHISHA HEROES 2023 〜超えて越えて頂へ〜

昨年は春秋通してリーグ2位で終幕し、釜范を主将とした新体制がスタート。「超克〜超えて、越えて、頂へ〜」をチームスローガンに掲げ、2011年秋以来となる覇権奪還に向けた戦いが幕を開けた。

だが、依然として勝負弱さが目立ち、ここまで5勝6敗、勝ち点1と苦戦を強いられている。1つでも高い順位で終えるためには、宿敵立命大撃破が必須だ。闘志を燃やした主将が気迫を前面に出し、昨秋に続く勝ち点奪取へ挑む。

情熱燃やし伝統の一戦で再起誓う

悔しさ募る

「チームをまとめて何としてでも今年はリーグ優勝に導きたい」。花野監督から指名を受け、背番号1を背負う覚悟を決めた。しかし、関大の歓声だけがグラウンドに鳴り響き、優勝の可能性が完全消滅。試合後、ベンチで悔しさをにじませる背番号1の姿がそこにあった。

「まずはAチーム入りを果たし、いずれはスタメンを勝ち取りたい」。釜范は漠然とした目標を抱き、北の大地から関西へ足を踏み入れた。2年生春には軽快な動きを高く評価され、セカンドで開幕スタメンをつかむと、全試合出場を果たし盗塁王を獲得。頭角を現し、誰もが将来の活躍を確信した。しかし、その成績をいまだ超えられていない。「自分が試合に出てこそだと思っていた分、チームが優勝争いをしているのに試合に出られなかったことは悔しかった」。昨シーズンは春秋通して4試合の先発出場にとどまり、15打数3安打、打率は0・200。成績は下降線をたどり、ベンチから戦況を見つめる時間が増えた。そして2季連続で2位となり、青地組が終幕。涙をこらえ、先輩たちがかなえられなかった夢を受け継いだ。

主将として

新チーム始動後は、前主将青地（スポ卒）や前エース髙橋（スポ卒）といった主力選手たちが抜けた穴を埋められず、戦力面で苦戦を強いられた。それでも、副将松井（スポ4）、塚本（商4）とともに総勢159人の大所帯をけん引。思うようにいかない日々の中でも気丈にナインを引っ張るその姿は、まさに主将そのものだった。そして迎えた春季リーグ戦、12年ぶりの覇権奪還を目標に掲げるもここまで5勝6敗、勝ち点1でリーグ5位と優勝争いから脱落。チャンスであと1本が出ないという課題を最後まで払拭できず、残すは同立戦のみとなった。

最後の戦い

目の色を変えた主将が目指すものはただ一つ。「去年の先輩たちが1年をかけて三塁側のベンチを勝ち取ってくれたので、1シーズンで譲るわけにはいかない」。大きな期待を背に受け、首位関大を2位で追いかける宿敵立命大から勝ち点奪取へ。数々のドラマを生み出してきた同立戦で歴史を継承すべく、今季最後の戦いが幕を開ける。【山田和輝】

高校時代の栄光を再び

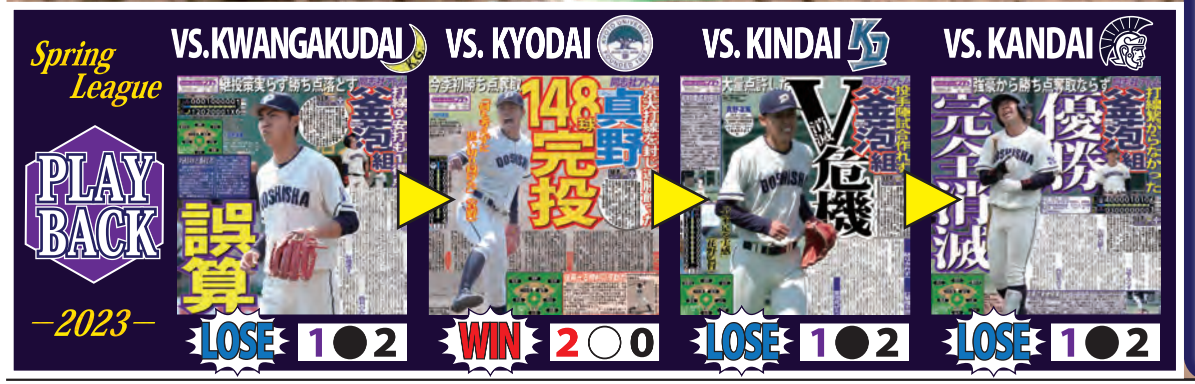
今年度主将を務める釜范は高校時代に札幌大谷で明治神宮野球大会優勝を経験。また選抜高校野球に初出場を果たすなど数々の功績を残してきた。

高校では2年生から主に2番セカンドとしてスタメン出場。チームの躍進に貢献し、母校の名を全国にとどろかせた。「守備や小技ができないと試合に出られない」。熾烈（しれつ）なメンバー争いの中で、常に自身の100％を出せるよう練習に励み、背番号4を必死の思いでつかみ取った。

3年時には内野リーダーを任されるほど守備力を高く評価され、監督から絶大な信頼を得た釜范。プレーで野手陣をけん引し、甲子園で躍動した。

「全国の舞台に出てもっと高いレベルでやりたいと感じた」。その経験は大学野球でも生かされ、全国大会へのこだわりを持ち続けている。高校時代の栄光を胸に、ラストイヤーを悔いなく全力で戦い抜く。

▲高校時代の釜范（画像・本人提供）



同志社
真野凜風
MAX152km/h
同立戦注目選手
MAX151km/h
立命館
谷脇弘起
© 立命スポーツ編集局

夏炉冬扇

▼伸びた前髪がうっとうしい。知らぬ間に目にかかるようになっていた黒髪がちらついて、視界を阻んだ▼昔から取捨選択が苦手だった。全てが大切なもののように錯覚し、必要なものとガラクタがないまぜになる。日用品はもちろん、思い出も、人脈も、過去の経験もそうだ。本当に尊重しなければならないものがどれなのかが次第に分からなくなる▼この春、日本中に熱狂の渦を巻き起こした侍ジャパン。準決勝の対メキシコ戦で、村上宗隆がサヨナラ打を放ち英雄になった。大会期間中、長く不振に苦しんだ村上はこの日も3打席連続三振に倒れており、犠打も脳裏をよぎった。それでも「打つしかない」と腹をくくると、渾身（こんしん）のフルスイング。自らの弱みを断ち切って繰り出した復活の一打だった▼昨秋にも彼は苦境に陥っていた。日本人シーズン最多本塁打記録の更新を目前にして、延べ60打席の足踏み。打席への恐怖心すら覚えた。全てを乗り越え56号を放った直後、「自分の気持ちを変えるのも自分の気持ち次第」と語った。不屈の英雄は、この信念によってここまでの道を切り開いてきたのだろう▼過去のしがらみを断ち切らなければ、決して前に進むことはできない。切り捨てるもの、残すべきものを見極めなければ、弱い自分からは抜け出せない▼今朝、自分で前髪を切った。洗面台に黒い切れ端が散らばる。弱い自分は、ハサミで断ち切ってしまおう。過去のしがらみは、水に流してしまおう。大舞台で華々しく復活を遂げた英雄のように。今の私を変えられるのは、私自身だけだ。【城山歩美】

レイアウト　西村　早智

YOUR Life Station
医療法人社団 石鎚会
Medical Corporation Sekitetsukai
救急告示病院
臨床研修協力病院
石鎚会は同志社アスリートを応援しています
京都田辺中央病院
TEL 0774-63-1111
毎週火曜日の整形外科外来は、
同志社大学
スポーツ健康科学部教授
北條 達也先生が
診察を担当されています。
〒610-0334
京都府京田辺市田辺中央六丁目1-6
（近鉄新田辺駅から徒歩２分　JR京田辺駅から徒歩３分）
https://www.sekitetsukai.kyoto
石鎚会facebookページはこちら

同志社アトムは
硬式野球部を
応援しています
同志社アトム

2023 選手名鑑

11 真野凜風

怪物

「自分がチームを勝たせなければいけない」。重圧がかかる中、覚悟を決めてラストイヤーに臨むエース。うなる豪速球で相手打線をねじ伏せ、勝利をもたらす真野は精神的支柱だ。

昨年は強力投手陣の一角を担うも、春秋ともにリーグ2位。あと一歩のところで優勝を逃した悔しさを胸に、オフは厳しい練習に明け暮れた。今年は昨季までの中継ぎとうってかわり、長いイニングを投げるための体づくりや体重増加に着手。得意のスライダーを含め全ての球種に磨きをかけた。また、昨冬には侍ジャパン大学日本代表候補選手に選ばれ、強化合宿に参加。他大学の選手のレベルの高さや意識の違いを実感し、投球技術をはじめ練習方法を吸収した。さらに投手リーダーとしても若手がそろう投手陣をけん引。「自分が先頭に立って、見本となれるように日頃から意識している」と大黒柱としての覚悟を示した。

しかし、今リーグ戦は実力を十分に出し切ることができず、苦戦を強いられている。制球の乱れからピンチを招き、甘く入ったボールを捉えられ失点するシーンが目立った。そんな苦しい状況下でも登板した6試合中2試合で完投。鍛え上げたスタミナを存分に発揮している。調子が悪くても気持ちのこもった強気なピッチングは健在。MAX152㌔の直球と多彩な変化球で相手打線を抑え込む。「自分が投げた試合は全て勝ちたい」。常に全力投球で相手打線に立ち向かうエースの姿は後ろを守る選手たちに勇気を与える。今秋のドラフト候補にも挙がる剛腕が栄光に向けて最後まで腕を振る。

28 浅野駿

俊足の巧打者

50㍍5・9秒を誇る部内随一の俊足が持ち味だ。

昨秋は代走要員として4試合の出場にとどまり、レギュラーをつかめなかった。課題だった変化球にうまく対応するため、オフ期間に取り組んだのは下半身の強化。悔しい思いを糧に人一倍トレーニングに励んだ。現在は主に2番打者として中軸へのつなぎ役を務め、対関学大3回戦ではマルチヒットの活躍で打線を勢いづけた。打席では逆方向への力強い打球を打つことを心がけ、攻守にわたり安定したプレーで戦力になっている。

「目標はリーグ戦優勝と、どれだけチームに貢献できるか」。後ろを打つ好打者たちにチャンスで回すためには浅野の出塁は欠かせない。勝利だけを目指し、持ち前の脚力を生かしてダイヤモンドを駆け回れ。

15 財原光優

気迫炸裂

いかなるピンチでも全力を出し切り、仲間のために腕を振る財原。先発だけでなく中継ぎも任され、サイドスローから繰り出すストレートとツーシームを得意とする。

オフシーズンはスタミナとコントロールの強化を図り、ウエートを中心としたトレーニングを実施。開幕前のOP戦でアピールに成功し、数多く在籍する上級生の投手陣を差し置いて、2年生ながらも第2先発の座を勝ち取った。

シーズンが始まり、迎えた対関学大2回戦。前日に逆転負けを喫し重苦しい空気が漂う中、4回無失点の好投で負の流れを断ち切った。現在9試合に登板し防御率は1・32。堂々たるピッチングでチームを引っ張っている。

「自分がピンチを招いても絶対に0点で抑えてチームを勢いに乗せるピッチングをしようと心がけている」。誰よりも無失点にこだわり、熱い思いで打者に立ち向かう。

4 篠原悠真

脚で魅せろ

俊足を生かした積極的な走塁と小技を得意とする篠原。塁に出ると自慢の脚力で塁上を駆け回る。「ピッチャーに球数を投げさせたり、守備をかく乱させたりする」と自身の役目を理解。つなぎを意識する姿勢は高い出塁率にも結びついている。

座右の銘は「継続は力なり」。「元々実力があるわけではない」と謙遜しながらも、日々の準備を怠らない。泥くさく必死に鍛錬を積み、昨秋は二塁手のスタメンに定着した。

今シーズンは先発出場が3試合にとどまっているが、ベンチで誰よりも声を張り上げ仲間を鼓舞する。「自分のおかげで勝てたと思える試合が1試合でも多くなるようにしたい」。少ない出番でも切り札が必要なときは必ずくる。流した汗を力に変え、同立戦のヒーローになれ。

16 清川大雅

中継ぎエース

最速144㌔のストレートと多彩な変化球で相手打線をねじ伏せる本格派右腕。

清川はオフシーズンに監督の助言でフォームをクイックモーションへと変更した。「シンプルに投げられるようになった」と力感のない動作から力のあるストレートを投げ込む。それに加え、落差の大きいフォークでカウントが取れるようになったことで投球の幅が大きく広がった。さらにはウエートトレーニングで下半身を強化。明らかに昨季よりもボールの威力が増し、開幕を迎えた。

今シーズンは主に中継ぎとして8試合に登板。ここまで19イニングを投げ、防御率は2点台前半と、安定した投球を見せている。「失点してしまうと流れが相手にいってしまうので、できるだけ0点で抑えられるように心がけている」。対関学大2回戦では4回を投げ、5奪三振無失点の快投を披露。開幕節でリリーフ投手としての役割を全うすると、その後も重要な場面でマウンドを任され、頼れる中継ぎエースへと成長を遂げた。

「先輩から中継ぎの心持ちやマウンドさばきを学んでいた」。1年生の秋からベンチ入りを果たし、昨年は2度にわたる優勝争いを経験。先輩たちと共に悔しさを味わった。今季は優勝の可能性が消滅してしまったが、宿敵立命大には負けるわけにいかない。前代から託された思いを胸に強力打線を圧倒し、わかさスタジアムで躍動する。

24 松井涼太

主砲

「チャンスで絶対打ってくれると思ってもらえる選手になりたい」。今年から4番としてスタメンに名を連ねる松井。引っ張るだけでなく逆方向にも強力な打球を弾き返し、抜群の打力で中軸を担っている。

昨春の対関大戦では1点リードの8回裏、右越えに強烈な打球を突き刺し公式戦初ホームランを放った。また昨秋は初めて規定打席に到達し、打率0・324、出塁率0・342をマーク。クリーンアップとしての役割を果たし、青地組の快進撃を支えた。

その打棒は今季さらにレベルアップを遂げている。チャンスの場面で打席に立つことをイメージし、一球一球を無駄にしない意識で練習を積み上げてきた。今リーグ戦1節目からその成果が表れ、開幕から7試合連続安打を記録。対近大1回戦では上位打線がつくった好機を逃すことなく、ライトフェンス直撃の一打で先制点をもたらした。「4番という意識よりも最上級生としての自覚が強い」。重責を請け負いながらも得点圏での強さでは右に出る者はおらず、ここまで8打点。力みのないコンパクトなバットさばきで、松井が理想とする選手像へと着実に近づいている。花野監督が「松井がチームの中心」と語るようにチームメートだけでなく首脳陣からも厚い信頼を寄せられる存在となった。

「自分がどれだけ返せるかが勝ちにつながる」。感覚をつかんだ天才肌のスラッガーはここまで打率0・450で首位打者争いを演じている。青地(スポ卒)、杉浦(商卒)、川久保に続く4季連続のタイトル獲得へ。釜范組の4番に座る頼れるキーマンが往年の宿敵対決を制すべく、攻撃の突破口を切り開く。

3 塚本大夢

気鋭

副将として挑むラストイヤーへの思いは特別だ。「入学してから絶対に1回は全国に行きたい」。昨年は惜しくも2季連続で2位という結末で終幕し、誰よりも歯がゆい思いをした塚本。今年こそ悲願をかなえるべく、オフシーズンは打撃練習に注力した。ここ数年は1年時に負った左手首のけがの影響により打撃不振。「後ろは小さく前は大きく」という監督からのアドバイスを意識し練習に励んだ。

このオフの取り組みは対近大3回戦で結果に表れる。1番三塁でスタメンに名を連ねると、初球を捉え左安打で出塁。得点には結びつかなかったが釜范組に勢いをもたらした。しかし、ここまで28打数7安打と不振に悩まされている。ベンチスタートの回数も増え、個人の課題が多く残った。

それでも、リーグ2位タイの4盗塁を記録し、塁に出れば盗塁を決め俊足をアピール。自慢の足で塁上を駆け回り、得点のチャンスを広げた。

塚本はプレーだけでなく、野球に取り組む姿勢でもチームをけん引。「後輩が野球をしやすい環境をつくっていかなければならない」。昨季まで主力だった4年生が抜け、今季は後輩が主戦として試合に出場。だからこそ、先輩として下級生が思い切ってグラウンドでプレーできるよう積極的にコミュニケーションを取っている。

残すは同立戦のみ。「ここまで1番近くで支えてきてくれた家族や監督に恩返しをし、最後監督を胴上げしたい」。感謝と恩返しの気持ちを胸に、勝利に導くのは他の誰でもなくこの男だ。

27 辻井心

輝く新戦力

突如現れた期待の新星辻井。入学早々にスタメンマスクをつかみ、攻守ともに存在感を放つ。

高校時代は京都国際高校で3度甲子園に出場。森下瑠大(現・横浜DeNAベイスターズ)擁するチームの一員として全国ベスト4に貢献した。「試合に出るための準備は高校からずっとしていた」。開幕2戦目の対関学大2回戦で初出場を果たすと、同点で迎えた6回裏に1死一、二塁のチャンスで打席が回った。外角低めのスライダーを捉えた打球はレフトへ。公式戦初安打が決勝打となり、今シーズン初勝利に導いた。

対京大2回戦では3度の盗塁を阻止し、キャッチャーとしても勝ち点奪取に貢献。継投策を多用するチームを支えるため、先輩とも積極的にコミュニケーションを図っている。

「チームを勝たせられるキャッチャーになりたい」。高い打撃力と強肩を兼ね備えた若き司令塔。同立戦でも先輩投手陣をけん引し続ける。

25 中森暁大

特大アーチ架けろ

中森にとって最大の強みはバッティングのパンチ力だ。「自分だけの強みなのでこれからも磨いていきたい」。初球からバットを振ることを意識し、相手投手にプレッシャーを与えるスイングを心掛けている。

昨秋は主に5番ファーストで起用され、クリーンアップとして存在感をアピール。自身の強みであるフルスイングで未来の4番候補が頭角を現した。

オフシーズンにはスイング力を強化すべく、メディシンボールを使ったトレーニングに励んだ。筋力が向上し、昨年よりも飛距離がアップ。「ここぞという時に一本を出して、チームの勝ち点獲得に貢献する」と決意を固め、目標を語った。

学年が上がり、中軸を担う覚悟が芽生えた今シーズン。開幕戦からスタメンに名を連ねると、初回にレフトへ先制タイムリーを放つ。流れを引き寄せる一打は、さらなる活躍を予感させた。

しかし、現在23打数5安打、打率0・217と本来の打撃は鳴りを潜めている。一刻も早い復調が待たれる中、「状況に応じて自分のやるべきことをする」と果敢な姿勢で毎試合挑み続けている。

それでも中森に求められるのは恵まれた体格を生かした飛距離であり長打だ。伝統の一戦では特大のアーチを描き、球場を盛り上げる。

2 川久保瞭太

守神

1年生の秋からスタメン出場を重ねる不動の遊撃手。「どんな状況でもしっかり全力でプレーしてチームを引っ張る」。その姿は勝利を呼び込む立役者だ。

昨秋のリーグ戦ではコンスタントに安打を積み重ね打率0・434をマーク。首位打者とベストナインに輝いた。他方では守りの中心として白星に大きく貢献。広い守備範囲を生かし、捕殺41とチームトップの成績を残した。

昨年12月、真野と共に侍ジャパン大学日本代表候補選手に選出され、強化合宿に参加。「自分の中で自信が持てた部分もあったが、全国からいろいろな選手が来て全然(実力が)足りていないことをすごく実感した」。特に、攻守ともに動きの精度の低さを痛感し、シーズンオフ期間中は体重増加に加え、瞬発力の強化に注力。トップレベルの選手が集まる場で、多くの収穫と課題を持ち帰った。

現在、打撃面では37打数4安打と不調。打率も1割近くと低[illegible]る。しかし、揺るぎ[illegible]力の高さが監督に評[illegible]ポジションは1度も[illegible]ていない。3年生に[illegible]える今シーズン、豊[illegible]経験を生かし、周囲[illegible]共有も徹底。初めて[illegible]ドに立つ選手も多い[illegible]位置を助言するなど[illegible]後輩たちとコミュニ[illegible]ンを取っている。

大学入学時から[illegible]し、自他ともに高[illegible]める川久保。「今は[illegible]じゃなくてチーム[illegible]が最優先で、そこ[illegible]自分のプレーがつ[illegible]くかが大事」。今[illegible]うな成績を残せて[illegible]同立戦で調子を取[illegible]守で熱気の渦を巻[illegible]

10 橋本光生

打撃職人

常に全力プレーの橋本光は、誰もが認める努力家だ。「謙虚であり、貪欲であれ」。この言葉をモットーに納得がいくまで技術を追求し、学ぶ姿勢を忘れない。「自分はホームランを打つバッターではない」と自己分析。確実性を上げるため、オフシーズンはコンタクト率の向上を目指した。

関学大との開幕戦では3番左翼で出場し、勝負強さを見せる。同点で迎えた9回表、先頭打者として中安打で出塁すると、4番松井の適時二塁打で勝ち越しのホームイン。結果的に逆転負けを喫したが、中軸起用に応えた。

一昨年の秋季リーグ戦ではリーグ4位の高打率を記録し、ベストナインを獲得。しかし、昨年はスタメン入りを果たせない時期を過ごした。「大事な場面でしっかり仕事を果たすのが自分のプレースタイル」。勝負を決める一打を放つべく、準備を一切怠らない。周囲からの期待を背負い、最高学年の意地を見せつける。

積み重ねてきた地道な努力の成果を発揮する時がきた。揺るがぬ技術で敵を打ち砕き、殊勲打を放て。

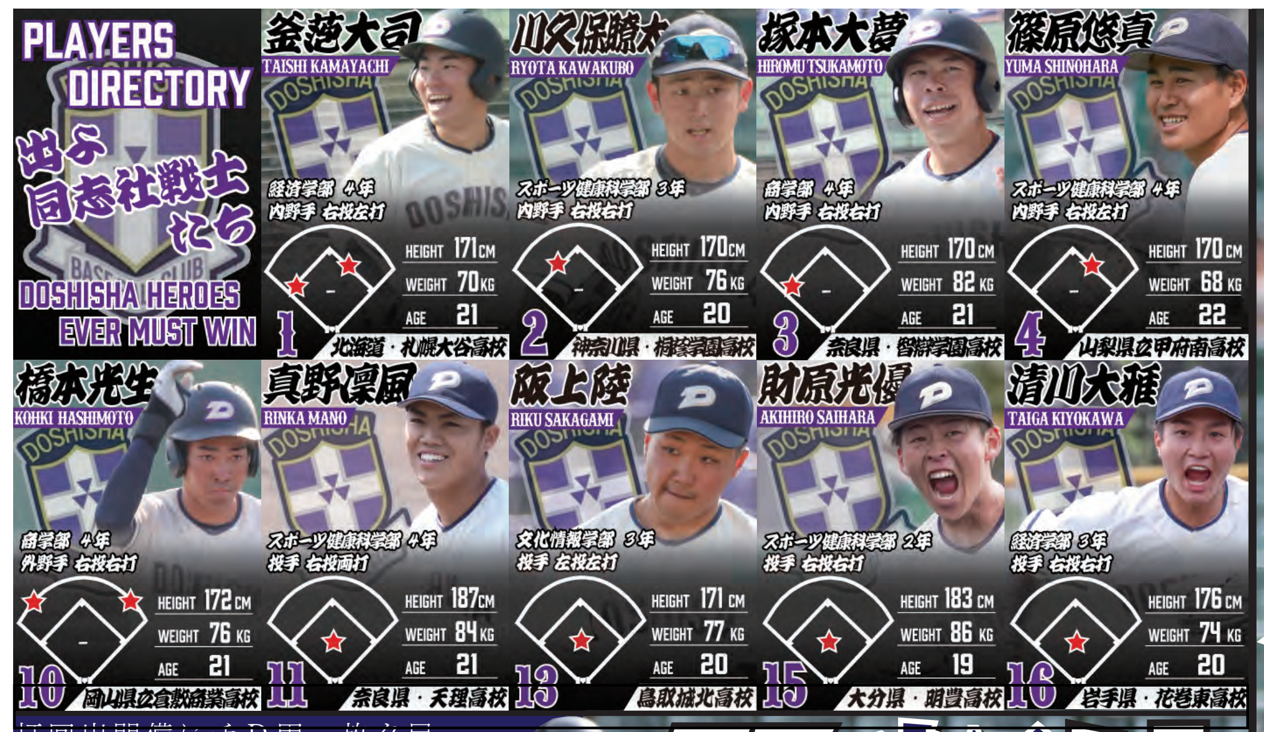
17 髙木寛斗

吠える左腕

昨年の秋季リーグ戦から中継ぎを任され、幾度となく窮地を救ってきた高木。持ち味は左腕から放たれるキレのあるスライダーだ。対京大1回戦では3回からリリーフとして登板し、ストレートとスライダーを織り交ぜた配球で打者を翻弄(ほんろう)。7三振を奪う活躍で京大打線を封じ込めた。

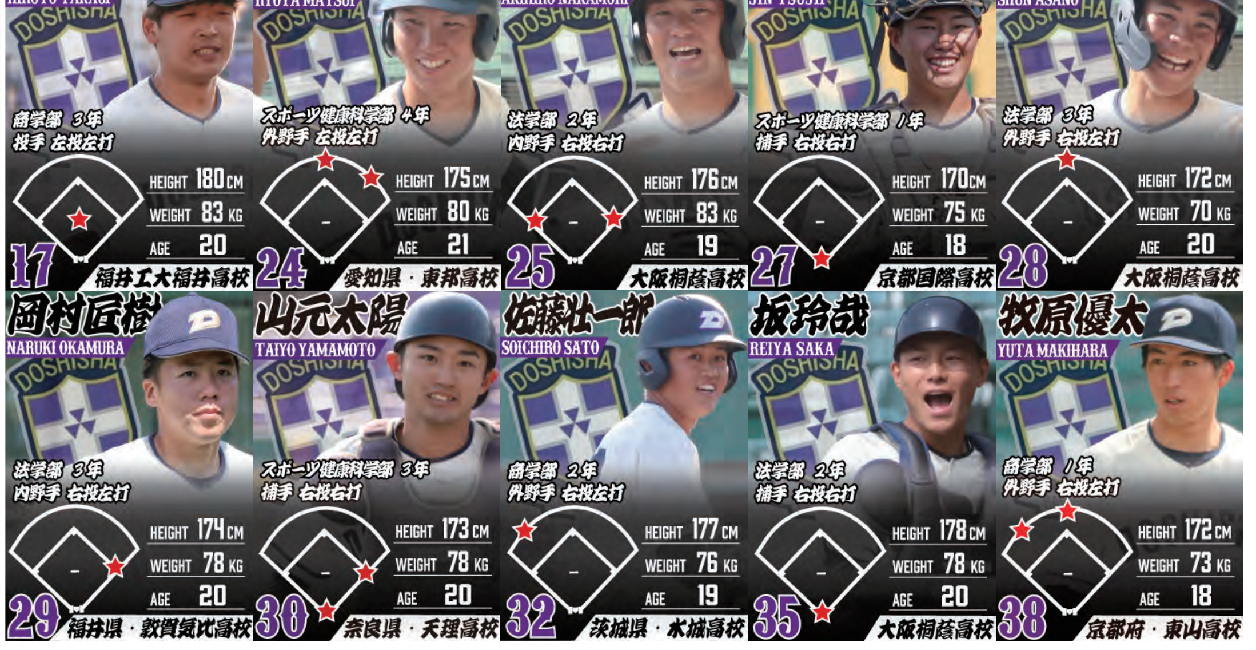
昨シーズンは「個人的にデッドボール、フォアボールを出してしまっていた」と反省。今季に向けてコントロールの向上を図り、肩の可動域を広げるストレッチと下半身のウエートトレーニングに取り組んだ。

「ピッチャーが点を取られなければチームが負けることはないので、自分がそこで貢献したい」。一球一球に全力を注ぎ、どんなピンチも守り抜く。さらに進化を遂げたサウスポーが勝利をもたらす。



PLAYERS DIRECTORY
出よ 同志社戦士たち
DOSHISHA HEROES EVER MUST WIN

No.	名前	NAME	学部・学年	守備・投打	HEIGHT	WEIGHT	AGE	出身校
1	釜范大司	TAISHI KAMAYACHI	経済学部 4年	内野手 右投左打	171CM	70KG	21	北海道・札幌大谷高校
2	川久保瞭太	RYOTA KAWAKUBO	スポーツ健康科学部 3年	内野手 右投右打	170CM	76KG	20	神奈川県・桐蔭学園高校
3	塚本大夢	HIROMU TSUKAMOTO	商学部 4年	内野手 右投右打	170CM	82KG	21	奈良県・智辯学園高校
4	篠原悠真	YUMA SHINOHARA	スポーツ健康科学部 4年	内野手 右投左打	170CM	68KG	22	山梨県立甲府南高校
10	橋本光生	KOHKI HASHIMOTO	商学部 4年	外野手 右投右打	172CM	76KG	21	岡山県立倉敷商業高校
11	真野凜風	RINKA MANO	スポーツ健康科学部 4年	投手 右投両打	187CM	84KG	21	奈良県・天理高校
13	阪上陸	RIKU SAKAGAMI	文化情報学部 3年	投手 左投左打	171CM	77KG	20	鳥取城北高校
15	財原光優	AKIHIRO SAIHARA	スポーツ健康科学部 2年	投手 右投右打	183CM	86KG	19	大分県・明豊高校
16	清川大雅	TAIGA KIYOKAWA	経済学部 3年	投手 右投右打	176CM	74KG	20	岩手県・花巻東高校



No.	名前	NAME	学部・学年	守備・投打	HEIGHT	WEIGHT	AGE	出身校
17	髙木寛斗	HIROTO TAKAGI	商学部 3年	投手 左投左打	180CM	83KG	20	福井工大福井高校
24	松井涼太	RYOTA MATSUI	スポーツ健康科学部 4年	外野手 左投左打	175CM	80KG	21	愛知県・東邦高校
25	中森暁大	AKIHIRO NAKAMORI	法学部 2年	内野手 右投右打	176CM	83KG	19	大阪桐蔭高校
27	辻井心	JIN TSUJII	スポーツ健康科学部 1年	捕手 右投右打	170CM	75KG	18	京都国際高校
28	浅野駿	SHUN ASANO	法学部 3年	外野手 右投左打	172CM	70KG	20	大阪桐蔭高校
29	岡村匠樹	NARUKI OKAMURA	法学部 3年	内野手 右投左打	174CM	78KG	20	福井県・敦賀気比高校
30	山元太陽	TAIYO YAMAMOTO	スポーツ健康科学部 3年	捕手 右投右打	173CM	78KG	20	奈良県・天理高校
32	佐藤壮一郎	SOICHIRO SATO	商学部 2年	外野手 右投左打	177CM	76KG	19	茨城県・水城高校
35	坂玲哉	REIYA SAKA	法学部 2年	捕手 右投右打	178CM	78KG	20	大阪桐蔭高校
38	牧原優太	YUTA MAKIHARA	商学部 1年	外野手 右投左打	172CM	73KG	18	京都府・東山高校

レイアウト 丸山 潤一郎

レイアウト 浅川 明日香

Playback Spring League

開幕節負け越し

第1節敗北　4/1・2・3　@わかさスタジアム京都　VS. KWANSEI GAKUIN UNIV.

◆篠原悠真（しのはら・ゆうま）2001年1月10日生まれ。山梨県立甲府南高校出身。右投げ左打ち。ポジションは内野手。170㌢・68㌔。スポーツ健康科学部4年。

悔しさをにじませる篠原

悲願である12年ぶりのリーグ制覇を目指し始動した釜萢組。昨年は春秋通じて勝ち越した関学大と対戦したが、1勝2敗で負け越し、開幕ダッシュ成功とはならなかった。

開幕戦は初回、3本の適時打を集め一挙5点を挙げるも、先発真野が6回途中6失点と炎上し勢いに乗れない。7―6と1点リードで迎えた9回裏、初登板の末冨（商2）が押し出し四球で追い付かれると、最後は左適時打を浴びサヨナラ負けを喫した。

2回戦は6回表まで0―0の緊迫した投手戦。「自分で決めてやろうという気持ちで打席に入った」と公式戦で初めてスタメンマスクをかぶるルーキー辻井（スポ1）が均衡を破る決勝打を放ち、対戦成績をタイに戻した。

運命の3回戦。「1回戦は情けないピッチングだったので気持ちを入れた」（真野）。リベンジに燃える真野が先発マウンドに上がるも、甘く入った球を痛打され2回途中3失点で降板。後を受けた4投手も関学大打線の流れを止められなかった。

攻撃も4回に1死一、三塁で代打山元（スポ3）が犠牲フライを放ち1点を返すもそれ以降はゼロ行進。計9安打を放ったがチャンスであと1本が出ず、1―6で敗北した。

投打で課題が露呈した開幕節。優勝へ厳しい船出となった。

○	▲	3回戦
1	0	(一)川久保6
2	0	(二)浅野8
0	0	(三)橋本光7
2	1	(四)松井9
0	0	(五)中森3
0	0	(六)辻井2
0	0	(七)塚本5
1	0	(八)篠原4
×	0	(九)真野1
6	1	

▲	○	2回戦
0	0	(一)川久保6
0	0	(二)浅野8
0	0	(三)橋本光7
0	0	(四)松井9
0	0	(五)中森3
1	0	(六)釜萢5
0	0	(七)辻井2
0	0	(八)篠原4
×	0	(九)財原1
1	0	

○	▲	1回戦
0	5	(一)川久保6
1	0	(二)浅野8
0	1	(三)橋本光7
2	0	(四)松井9
1	0	(五)中森3
2	0	(六)塚本5
0	0	(七)釜萢4
0	0	(八)山元2
2×	1	(九)真野1
8	7	

今季初勝ち点

第２節勝利　@マイネットスタジアム皇子山

笑顔で出迎える選手たち

4/8・9　VS.KYOTO UNIV.

エースと４番の活躍が光り、京大相手に勝ち点をつかんだ。

１回戦では野手陣が奮起する。４回、イニング先頭の川久保が左二塁打でチャンスメーク。無死二塁の場面で松井（スポ４）が打席に入る。積極的な打撃で初球を捉え、先制となる中適時打を放った。さらに９回にも無死一、二塁の場面で打席が回り、ダメ押しの中適時打。松井を筆頭に打線がつながり、１試合で７点を奪った。

一方、投手陣は財原（スポ２）、髙木（商３）、清川（経３）、橋本裕（商２）と４人の投手リレー。京大打線を被安打５、１失点に抑え、快勝を収めた。

連勝を懸けて挑んだ２回戦は真野がマウンドに上がった。序盤は制球に苦しんだものの、３回以降は立て直し６、７回には４奪三振。対関学大戦での不調を払拭するような快投で完投勝利を挙げた。

これ以上の負けは許されなかったが、自信を取り戻す対京大戦２連勝。２日間で18安打11得点２失点と好成績を残し、昨春王者近大との戦いに弾みをつけた。

○	▲	1回戦
0	0	(一)牧原7
0	0	(二)浅野8
0	0	(三)川久保6
1	1	(四)松井9
0	0	(五)中森3
0	0	(六)塚本5
0	3	(七)釜萢4
0	1	(八)辻井2
0	2	(九)財原1
1	7	

▲	○	2回戦
2	0	(一)牧原7
0	0	(二)浅野8
0	0	(三)川久保6
2	0	(四)松井9
0	0	(五)中森5
0	0	(六)岡村3
0	0	(七)釜萢4
0	1	(八)辻井2
×	0	(九)真野1
4	1	

優勝遠のく連敗

4/14・16・22@阪神甲子園球場・南港中央野球場

優勝争いに残り続けるためには星を１つも落とせない中でナインは聖地甲子園に乗り込んだ。

初戦は投打の柱が躍動する。６回、一打先制の場面で松井が捉えた打球はライトフェンスに直撃し２人が生還。さらに辻井にも適時打が飛び出しリードを広げた。投げては真野が９回を１人で投げ抜き１失点の完投勝利。相手を寄せ付けず試合を支配した。

２回戦は小刻みな継投策で勝負に出た。髙木は３回１失点と粘るも、中継ぎが５、６回に立て続いて失点。打線は９回に一打同点のチャンスをつくるも１点にとどまり、連勝は3でストップした。

「負けたら最下位争いだから（３回戦は）なんとしてでも勝たないといけない」（花野監督）。その思いとは裏腹に序盤から劣勢を強いられる。真野は安定感がなく２回３失点でKO。リリーフ陣も近大打線を止められず、14安打９失点と精彩を欠いた。攻撃陣は３回に２点を挙げるも以降は沈黙。大敗を喫し、第３節を終えて勝ち点を２つ落とす厳しい状況に追い込まれた。

1回戦		
▲	000003000	3
○	000001000	1

(一)塚本5　(二)浅野8　(三)川久保6　(四)松井9　(五)中森3　(六)橋本光7　(七)辻井2　(八)釜萢4　(九)真野1

2回戦		
○	010011000	3
▲	010000001	2

(一)牧原7　(二)浅野8　(三)川久保6　(四)松井9　(五)中森3　(六)釜萢5　(七)辻井2　(八)篠原4　(九)髙木1

3回戦		
▲	002000000	2
○	12030030×	9

(一)塚本5　(二)浅野8　(三)山元3　(四)松井9　(五)辻井2　(六)釜萢4　(七)佐藤壮7　(八)川久保6　(九)真野1

第３節敗北　VS. KINDAI UNIV.

◆真野凜風（まの・りんか）2002年１月８日生まれ。奈良県・天理高校出身。右投げ両打ち。ポジションはピッチャー。187㌢・84㌔。スポーツ健康科学部4年。

打ち込まれる真野

頂への道途絶えた

第４節敗北　5/3・4・6　@南港中央野球場　VS. KANSAI UNIV.

ぼうぜんと立ち尽くす川久保

◆川久保瞭太（かわくぼ・りょうた）２００２年12月14日生まれ。神奈川県・桐蔭学園高校出身。右投げ右打ち。ポジションは遊撃手。170㌢・76㌔。スポーツ健康科学部3年。

12年ぶりの覇権奪還に向け、負けが許されない釜萢組は昨秋の覇者関大と激突。総力戦で挑むも1勝2敗で星を取りこぼし、全日本大学野球選手権大会出場の夢が途絶えた。

初戦は7回まで緊迫した投手戦となるも、同志社が均衡を破る。8回に1死三塁の好機を演出すると代打岡村（法3）の犠飛で決勝点を奪い、接戦をものにした。

2回戦はうってかわり、川久保のミスをきっかけに先制を許す。3回にも1死一、二塁のピンチで遊飛を捕球した川久保が併殺を狙うも、悪送球となり追加点を献上。打撃陣も最後まで攻略の糸口をつかめず2―6で敗れ、勝負の行方は第3戦へ持ち越された。

「関大に少しでも嫌なイメージを植えつけられるように勝ち点を取ろう」（釜萢・経4）。勝ち越しに向けて臨んだ3回戦は、序盤からゲームが動いた。先発を務めた髙木が1回もたず4失点で降板。打線は2回に3点を奪い1点差まで詰め寄るも反撃はつかの間、6、8回にも1点ずつを失い3―6で敗北となった。

関大に連敗し、目標としていたリーグ優勝の可能性が完全に消滅。今節まで残されていたいちるの望みが絶たれた。

▲	○	1回戦
0	0	(一)塚本5
0	0	(二)牧原8
0	0	(三)川久保6
0	0	(四)松井9
0	0	(五)山元3
0	0	(六)釜萢4
0	0	(七)辻井2
1	0	(八)佐藤壮7
×	0	(九)真野1
1	0	

○	▲	2回戦
0	0	(一)塚本5
2	0	(二)加藤7
3	1	(三)川久保6
0	0	(四)松井8
0	1	(五)辻井2
0	0	(六)岡村3
1	0	(七)釜萢4
0	0	(八)近藤9
×	0	(九)土岐1
6	2	

▲	○	3回戦
0	4	(一)塚本5
3	0	(二)橋本光9
0	0	(三)川久保6
0	0	(四)松井8
0	0	(五)山元3
0	1	(六)辻井2
0	0	(七)大江7
0	1	(八)釜萢4
0	0	(九)髙木1
3	6	

愛込めた献身

誰よりも情が厚く、部活を愛す。吉田百は高校時代のマネージャー経験を生かし、より現場に近いトレーナーとして野球に関わっている。主な役割はコンディショニング管理やけがの治療。仲間が最大限のパフォーマンスを発揮できるよう尽力し、常に目配りを徹底する。陰ながら地道に努力を積み上げてきた選手たちからグラウンド上で活躍したときにかけられる「ありがとう」。この感謝の言葉が彼女にとって１番の原動力となっている。

「誰からも頼られる人でありたい」。献身的な姿勢は部員にとって大きな支えになっているに違いない。今日も勝利に向けてサポートを続ける。

◆吉田百花（よしだ・ももか）2002年2月17日生まれ。京都府・同志社高校出身。スポーツ健康科学部4年。

学生トレーナー

不屈の精神力

渉外や道具の管理など、多様な業務をこなす影の大黒柱。献身的な働きで周囲から多くの支持を集める吉田朋は、２年生の終わりに選手からマネージャーへの転向を決めた。たとえ活躍の場が変わっても、粘り強く取り組む姿勢を忘れたことは１度もない。下級生の助けも借りながら、慣れない仕事も意欲的に行ってきた。重くのしかかる責任を痛感する日々の中で、課せられた使命と真摯（しんし）に向き合っている。

「最もやりがいを感じるのは、自分の取り組みがチームを強くする一因になっていると思うとき」。チームの勝利を願う熱い思いが、釜萢組を高みへ突き動かす。

◆吉田朋弘（よしだ・ともひろ）2001年11月17日生まれ。大阪府・同志社香里高校出身。スポーツ健康科学部4年。

主務

使命を果たす

陰ながらチームを支え続ける鵜殿。２年生の５月に学生コーチへ転身し、裏方として野球と向き合っている。

主な仕事はピッチャーを中心にコンディションの確認や監督との連絡。「ピッチャー陣の結果が振るわないときや監督と選手の中で意見が合わないときがしんどい」と心情を吐露することもあった。しかし、「勝利に貢献したい」という一心で選手と首脳陣の間に立ち、学生コーチとして全力でサポートしている。

大学野球も残り１年を切った。グラウンドに立つことはないが、目標とする「勝てるチーム」を築き上げるべく役割を全うし、仲間と共に最後まで駆け抜ける。

◆鵜殿輝希（うどの・てるき）2001年5月9日生まれ。宮城県立仙台南高校出身。商学部4年。

学生コーチ

戦力分析

5/20・21@WAKASA STADIUM

4年ぶりのリーグ制覇達成に向け、立命大は準備万端だ。昨年の秋季リーグ戦は４勝６敗で４位に終わったものの、６敗中５敗が１点差。戦力がそろっているだけに、今年こそ栄冠をつかみ取りたい。

全国屈指の実力を誇る投手陣の中でも谷脇のゲームメーク力が際立つ。最速151㌔の力強い直球と鋭いスライダーを武器に相手打線を寄せ付けない。昨秋の同立戦でも６回を投げ自責点２の好投で接戦を演出した。長いイニングを投げ切るスタミナを持ち、序盤の攻略が勝敗の行方を左右する。

一方の打線は中軸に要警戒だ。今季からレギュラーに定着した竹内が絶好調。３番打者として開幕から９試合で20出塁と勢いに乗り、攻撃に流れを呼ぶ。４番を打つ西村も対京大２回戦で逆転の３点本塁打を放つなど長打力に定評がある。得点圏に強い５番桃谷の前を打つ２人の出塁を阻止することが必要不可欠だ。

２季連続の勝ち点獲得を狙う同志社と覇権奪還を掲げる立命大。両校の意地とプライドがぶつかり合う戦いの火ぶたが切られる。

©立命スポーツ編集局

RITSUMEIKAN HOSHIKO KAISEI　DOSHISHA MANO RINKA

昨季は春秋ともに２位で終わり、惜しくも優勝には届かなかった。２０１１年秋以来のリーグ制覇を目指し、今年も多士済々の顔ぶれがそろう。

投手陣では今秋のドラフト候補である真野が主軸。MAX １５２㌔のストレートとキレのある変化球で打者を翻弄（ほんろう）し、アウトを積み重ねる。今季から先発に再挑戦し、２試合連続で完投勝利を収めるなど、スタミナ十分な右腕が宿敵撃破へ導くに違いない。２年目の財原はサイドスローから繰り出される動く球が特徴。バットの芯を外す投球術に今節も期待だ。

力投を続けている投手陣を援護するためにも得点力は欠かせない。全試合４番に座る松井はここまで安打数リーグ１位。打率も５割近くを残し、バットが火を吹いている。捕手の辻井はルーキーながらも初節からスタメンマスクをかぶり続けてきた。打撃でも存在感を見せつけ、勝負どころで快音を響かせる。

昨秋は劇的なサヨナラ勝ちもあり、同立戦で２連勝を飾った。今年も投打の要が躍動し、勝ち点奪取へ勢いをもたらす。

レイアウト　大嶽　悠雅

スマホ対応
ヘッドライン
過去紙面掲載
新ホームページはこちら
同志社スポーツアトム
official web site 編集局

同志社スポーツユニオン
体育会５１クラブのOB・OGから組織されています
同志社スポーツユニオンは同志社アスリートを支援、応援致します！
http://www.doshisha-su.com/
○ウェブサイトを通じて同志社スポーツを応援しましょう！
○新年度　ウェブサポーター　募集中！
お申込み・お問い合わせ
〒610-0394
京田辺市多々羅都谷1-3
同志社スポーツユニオン事務局
TEL：0774-65-7418　FAX：0774-65-7416
E-Mail：jt-1spor@mail.doshisha.ac.jp

紙器用板紙全般
大和板紙株式会社
DAIWA ITAGAMI
代表取締役社長
北村貴則
（平成５年度商学部卒業）
本社工場　〒582-0004 大阪府柏原市河原町5-32
電話　柏原（0729）71-1445 代表
FAX（0729）71-1449

スキー部女子 10連覇

チーム力を発揮し栄光つかんだ

◆青谷夏凜
（あおたに・かりん）
2002年8月18日生まれ。滋賀県・比叡山高校出身。165㌢。商学部3年。

笑顔で滑る青谷【切り込み写真】ピースをする左・渡邉（商4）・中央・青谷、右・近藤（商2）（撮影・小島葵）

◆3月2～7日◆第93回全関西学生スキー選手権大会◆於・妙高高原（新潟県）

◆2位の京産大と20・3ポイント差をつけて女子総合1位を獲得。関西10連覇の偉業を達成した。アルペン種目では、平井がSL（スラローム＝回転）で2年連続の金メダル。一方のクロスカントリー種目では、渡邉が全種目で頂点に輝いた。また、最終種目の女子3×5キロリレーでは渡邉、近藤、青谷の3人が終始独走。チーム一丸となって関西王者の座を守りきった。新たに始動した渡邉組は、連覇更新に向けて全力で駆け抜ける。

「このチームなら絶対に優勝できると信じていた」（平井・商卒）

不撓不屈

「先輩たちが残してくれた9連覇を私たちの代で終わらせたくない」（平井）。記録を塗り替えるべく、女子総合10連覇を目標に挑んだ。大会1日目、クロスカントリー競技の10キロクラシカルでは、渡邉が死力を尽くし1位でゴール。最後まで諦めない姿は観客の心を揺さぶった。一方アルペン競技の学校対抗GS（ジャイアントスラローム＝大回転）では、平井が3位、森口（法4）がDNF（途中棄権）という結果に。平井は「優勝を目指していたので、3位だったことは残念」と悔しさをにじませた。

2日目は前日のリベンジを誓い、チャンピオン大会GSに臨んだが、1走目後に会場全体が霧に包まれ一時中断。再開を願い準備を整えるも、スタート地点の天候が回復せず2走目がキャンセルに。口惜しい思いの卒業生の目からは涙があふれた。3日目は気持ちを切り替えて挑み、個々の実力を発揮。渡邉と平井がそれぞれ5キロフリーとチャンピオン大会SLで圧倒的な強さを見せ優勝を成し遂げる。しかし、2位の京産大との差はわずか0・3ポイント。3種目を残し、チーム内には緊張感が漂った。

快挙達成

10連覇達成に向けて正念場となった4日目。スプリントでは出場した3選手が1、2、4位に入り、試合を控えるチームメートの士気を高めた。学校対抗SLの会場では、カレッジソングが響き渡り同志社一色の雰囲気に。流れに乗った平井が執念の滑走を見せ、今大会2度目の1位に輝いた。女子

迎えた大会最終種目、3×5キロリレー。1走目の渡邉が好スタートを切ると、郡を抜いた速さでトップを快走。バトンを受け取った近藤が2位との差を広げ、アンカーの青谷へ。「仲間が後ろとの差をつけてくれたので頑張れた」（青谷）。2位と3分近く差をつけ場内へ入った。平井から受け取った同志社パープルの団旗を両手に持ち笑顔でゴール。10年連続で関西の頂に君臨した。「プレッシャーはあったが、このメンバーなら絶対に優勝できると信じていた」（平井）。個人種目が多い競技ながらも全員で戦い抜き、勝利をつかんだ。

継往開来

「来年、女子全関西11連覇を達成してほしい」（平井）。快挙を成し遂げてきた4年生は今大会をもって引退。新たに主将に就任した渡邉は「継往開来」をスローガンに掲げ、10年続いてきた連覇の思いを引き継ぎ新たな歴史を刻む。【渡邉柚果】

◆第９３回全関西学生スキー選手権大会◆

順	大学名	合計
①	同志社	143.0
②	京産大	122.7
③	武庫川女大	80.0
④	関学大	45.0
⑤	立命大	43.7
⑥	阪　大	33.7
⑦	龍谷大	21.7
⑧	大産大	19.3

連覇の襷次世代につないだ

集合写真を撮る選手たち

個人種目で渡邉と平井がともにトップに輝き、圧倒的な実力を示した。

今大会から主将を務めた渡邉は10キロクラシカル、5キロフリー、スプリントのクロスカントリー全種目で頂点の座に君臨。課題であったレース後半の失速を克服すべく、スピードトレーニングを重点的に実践した。そして、レースをトップギアで滑り切るスタミナを習得。全レースで首位を独走し3冠を達成した。

一方の平井もアルペンで2つの金メダルを獲得する。チームの勝ち点へ直結する大学対抗戦ではSLで1位、GSで3位となり、10連覇に大きく貢献。また、チャンピオン大会でもSLで優勝を果たし、ラストレースを有終の美で飾った。

「すごいことを成し遂げることができたと思う」（平井）。前主将として重圧がのしかかる中で最大限の滑走を見せ、連覇のたすきを後輩へとつないだ。次世代はさらなる記録更新へと前進し続ける。

應援團指導部　美学生図鑑

体育会 Ver.No.44

◆加田光
（かだ・ひかる）
2001年10月3日生まれ。大阪府・同志社香里高校出身。法学部4年。

応援する加田

心奮わす声援

くっきりとした目鼻立ちで、爽やかな笑顔が際立つ。今年度第115代團長を務める加田の表情は、試合会場に入るとうってかわって鋭い視線に。低音ボイスが先導し、選手を後押しする。

幼少期から誰に対しても分け隔てなく接し、皆に愛される人望を持つ。バレンタインでは彼女にもらった1つの本命チョコを大事にする一途な一面ものぞかせた。

17歳で参加した関関同立連盟祭での演舞に感銘を受け、ひときわ引かれた同志社大学應援團への入團を決意。バスケットボール部で過ごした高校生活は不完全燃焼で終え、大学生活では応援に全てをささげることを誓った。人との巡り合わせが良く、人柄の良さがにじみ出る加田。「同期が支えてくれている分自分も最大限にできることをしたい」と周りの存在を原動力に、三部で構成される應援團のトップに立つ。

今年から声出し応援の制限が緩和され、活躍の場が増えた。「團員の心をつかみ、応援する全体育会選手の心をつかむ」。周りに優しく、己に厳しく。常に前進し体育会を盛り上げる。【長瀬来瞳】

ボードセイリング部

◆2月24～26日◆2022年度全日本学生ボードセーリング選手権大学対抗戦◆於・和歌山セーリングセンター

チーム一丸となって臨んだインカレ団体戦。惜しくも表彰台には届かず、4位入賞でシーズンを締めくくった。

初日は無風の影響を受け本領を発揮できず、坂井（文情4）、藤原（商4）、齋藤（政策3）ともに不本意な結果に。暫定6位で迎えた2日目は、順位を上げることができず劣勢に立たされた。仲間の声援を背に挑んだ最終日。齋藤がトップでゴールし巻き返しを見せたが、3位には一歩及ばず悔いが残る結果となった。

「来年は表彰台の一番上を取りたい」（齋藤）。次世代も全員で新たな風波に立ち向かう。

テニス部女子

◆3月3～5日◆令和4年度関西学生新進テニストーナメント◆於・万博テニスガーデン（大阪府）

新体制で迎えた今季初の公式戦。渡辺（スポ4）・山口（スポ2）ペアがベスト8の成績を収めた。

1Rを難なく制し、2Rのコートに立った。順調に得点を重ね、6－1、6－2で圧勝。3組が出場した女子ダブルスでは唯一の3R進出を決めた。

晴天の中迎えた準々決勝は、関大と対戦。終始試合の主導権を握られる時間が続いた。必死に食らいつきデュースに持ち込むが、一歩及ばず点差が開く。ゲーム終盤はミスが目立ち、両セットともに3－6で敗北。ベスト4を目前に今大会は幕を閉じた。

「次は優勝を目指す」（渡辺）。インカレにつながる春関西学生テニストーナメントに向け、収穫を手に会場を後にした。

ボウリング部　男女アベック優勝

◆2月22日◆第54回全日本大学個人ボウリング選手権◆於・キョーイチボウル宇治（京都府）

真骨頂見せ　連覇成し遂げた

◆斎藤翔
（さいとう・しょう）
2002年7月19日生まれ。愛知県立鳴海高校出身。177㌢。スポーツ健康科学部3年。

振りかぶる斎藤

男子の部では斎藤が大会連覇を達成し、ボウリング界に存在感を残した。

頂点への条件は予選、準決勝、決勝を合わせた21ゲームのトータルスコアで首位に立つこと。予選、準決勝に突破し、暫定1位で決勝へ駒を進めた。

決勝戦は左投げの中里（沖縄国際大）との一騎打ち。開始時の差は18ピンと油断できない展開が続く。さらに、レーン変更を余儀無くされるアクシデントにも見舞われた。しかし、乱れることなく、いつも通りの動きを意識。集中力を高く保ち、対戦相手のスコアを確認しながら落ち着いた投球を見せた。「左投げの人が優勝するという流れがあったのでそれを変えたかった」。持ち前の勝負強さを発揮し、着実にスコアを伸ばした。接戦の末、4666ピンで2位と17ピン差をつけ優勝。全国制覇を果たし、再び栄冠を手にした。

「なんでもプラスに変えられたのが勝因だと思う」。前回王者としてのプレッシャーをはねのけ快挙達成。高い実力と精神力を兼ね備える斎藤の快進撃は止まらない。

3年目で　悲願の完全制覇

◆戸塚眞由
（とつか・まゆ）
2002年1月9日生まれ。愛知県立木曽川高校出身。155㌢。商学部4年。

球を投げる戸塚

戸塚が女子の部で悲願の優勝を果たし、大学日本一の称号を手にした。

昨年末の全日本大学選手権、2月の関西学生個人選手権で頂点に君臨したエース戸塚。「今大会も必ず優勝したい」と高い志をもって戦いに挑んだ。

滑り出しは不調で11位に沈む。しかし、予選2回戦の第1ゲームに転機が訪れた。研ぎ澄まされた集中力を存分に生かしてコースを狙い、叩き出したのは驚異の11連続ストライク。ここで勢いづくと瞬く間にトップに躍り出た。

決勝戦は、2位以下に180ピン以上の大差をつけた状態で始まった。他の追随を許さない安定感のある投球を続け、スコア4631でフィニッシュ。186ピン差を守り抜き、首位に輝いた。さらに、ハイゲーム299、ハイシリーズ783で女子の部における全ての表彰を独占。「3年間ずっと挑戦し続けてきた大会で、やっと優勝できたのでうれしい」。首にかけられた念願の金メダルに顔をほころばせた。

驚愕（きょうがく）の精神力と巧みなテクニックでライバルをなぎ倒す技能派サウスポー。絶対的女王の勢いはとどまることを知らない。

サッカー部男子　4大会連続優勝

◆3月26日◆第73回京都学生サッカー選手権大会◆於・たけびしスタジアム京都

昨年覇者として挑んだ今大会で4大会連続の京都府王者に輝いた。

初戦は新体制の不安定さが目立つも、1－0で京大に辛勝。準決勝は立命大に先制点を許すが、土壇場で同点弾を放つ。PK戦を4－2で制し、王座を懸けた戦いへ駒を進めた。

京産大との決勝戦、スタンドから熱のこもった声援が送られる。序盤から積極的にプレスをかけるが、膠着（こうちゃく）状態が続く。後半終了間際に好機が訪れるも、バーにはじかれ決定打とはならなかった。

PK戦へ突入し、サドンデスの8本目で勝負が決まった。廣島（社3）のキックが成功すると、対する京産大のキックをGK波多野（スポ2）が好セーブ。その瞬間4連覇が決まり、スタジアムは大きな歓声に包まれた。

「満足せずに次に向けてレベルアップできるように頑張りたい」（國府田・政策4）。大会を通じて一体感が出てきた國府田組。今大会の優勝を自信に変え、インカレ出場に向けて戦い続ける。

トロフィーを掲げる選手たち

レイアウト　西田　雄哉

@atom_doshisha
Follow us on Instagram

同志社 田辺キャンパス から 約3分!
駅前申込所
同志社女子大
同志社大学
JR同志社前駅
送迎バス毎時3便
三山木駅
●当校
山城田辺自動車学校
京都府京田辺市普賢寺中島4-9　TEL 0774-63-6600

広告募集中!!
ご相談・お見積り承ります
お問い合わせは下記連絡フォームまで
https://doshisha-atom.net/promotion/
〒602－8280
京都市上京区上立売新町西入ル
西大路町 61－1
mail:sportsatom.contact@gmail.com

生島峰至 黄金時代語る

勝つ楽しさを学んだ大学野球

連覇遂げた最強世代の４番が

将来の野球界を盛り上げる

◆特別インタビュー◆３月20日◆於・ＢＡＳＥ ＢＡＬＬ ＴＩＭＥ（大阪府）◆４番としてリーグ４連覇に貢献し、黄金時代を支え続けた生島峰至。２年生の春からスタメンに名を連ね、パワフルなバッティングを武器に活躍した。４年生時には副将として当時主将の小林誠司（現・読売ジャイアンツ）とともにチームをけん引。チームメートや首脳陣から絶大な信頼を置かれる存在となった。今回のインタビューでは、硬式野球部で過ごした４年間や現役選手たちへのメッセージを語ってもらった。

４連覇の栄光

――同立戦を振り返って

同立戦は昔から関西の中でもすごい盛り上がりがありましたし、リーグ戦の中でも盛り上がる一戦だと思います。また、応援があるのとないのとでは試合の雰囲気も違うと思うので、僕的には楽しくやらせてもらいました。

３年生の時も４年生の時も僕たちが勝てばリーグ優勝っていう試合が多かったので、いい緊張感もありながら同立戦に臨めました。個人のプレーよりかは「チームが勝つこと」が最優先だったので、ヒット１本１本も節々で覚えていますが、それでも胴上げの瞬間やマウンドにみんなで駆け寄る瞬間が一番の同立戦の思い出です。

――当時の硬式野球部

他の５大学に負ける気がしなかったです。当時、児玉監督が采配していましたが、「勝つことの楽しさ」を一番に教えてくれました。そして、社会人野球でも活躍した（当時）前主将の藤井貴之さん（２０１１年卒）がチームを引っ張り、必死についていくことでさまざまな会話や意見交換ができました。いい意味で言い合いなどもありましたが、その中でリーグ優勝できたことは強かったと思います。

４年生になってもその意識は変わらず、とにかく優勝することだけを第一に考えてプレーしていましたが、高校と違って授業形態が異なることや同学年の中でも就職活動を行う人が多いので、その部分では高校と違うところだと思いました。チームをどのように同じ方向に向かせるかをキャプテンの（小林）誠司とともにミーティングを通してたくさん話したことを覚えています。

――リーグ連覇の重圧

プレッシャーを感じることはなかったです。リーグ戦連覇のことよりも神宮大会や選手権大会などの全国の舞台に行きたい気持ちが一番にありました。リーグ戦で２連覇や３連覇しようが関係なく、１つのリーグ戦を勝ち抜いて１つ上のステージへ行くことだけを考えていました。

――野球部で得たもの

当時の監督含め、先輩、後輩、あとは同級生に出会えたのが野球部で得たものだと思います。個人としても４年間で何かタイトルを取ったわけでもないので、リーグ４連覇を出会えた仲間と成し遂げることができたのが４年間の中では一番良かったかなと思います。

後輩への思い

――優勝に必要なことは？

僕たちの頃も同じことに苦戦しましたが、「リーグ優勝」のことしか考えていなかったので、何百人いる部員の中で全員に同じ目標を意思疎通するのは難しいと思います。それでも、リーグ優勝という言葉は全員が常に口に出すようになるぐらいまで同じ意識を持つ必要があると思います。口に出すことで、その後の行動や練習の取り組みが変わると思うので、参考にしてもらいたいです。

――硬式野球部に向けて

これから大学卒業後に社会人野球に進む選手、野球を辞める選手など、それぞれ違う道に向かうと思いますが、このメンバーと野球ができる日数も決まっているので、一日一日を大切に仲間と過ごしてもらえたらいいなと思います。【取材・構成＝山田和輝・杉本優衣】

取材を受ける生島

全盛期築く

大学時代はあふれる闘志で４番打者を担い、副将として活躍。１年生の春からベンチ入りを果たし、２年生の春にはレギュラーに定着した。

「僕以外の選手が試合に出ることは考えたことがない」。強気な言葉から感じられる大きな自信は気迫に満ちたプレーにあった。持ち味は鍛えられた打撃力。２０１０年春の同立戦では3点本塁打を放ち、勝利に貢献した。リーグ戦４連覇の立役者となり、一時代を形成。常に全力を出し切るその姿は、仲間の原動力となった。

４年間周囲の期待を背負い、チームのために走り続けた生島。「重圧はなかった」と語るが、そこには人知れない努力が隠れていたに違いない。

表彰を受ける左・生島、右・小林（画像・本人提供）

◆生島峰至

（いくしま・たかし）

１９８９年９月 25 日生まれ。２０１８年まで西濃運輸硬式野球部で活躍。１７５センチ・79キロ。２０１２年度同志社大学商学部卒。

未来へつなぐ

「野球原石のモッタイナイをなくす」。現役を引退後、第２の人生を考える中で強い思いが湧き上がった。

現役の頃から将来は野球を伝える仕事をするという使命感があった生島。現在はアットコンヴェイ株式会社を設立し、代表取締役を務めている。

業務内容は主に野球スクールやオンラインスクールの運営。大阪と名古屋に小、中学生を対象としたスクールを持ち、5月には四日市に新規オープンと規模を拡大させている。また、「B-link」という小指２本入れ専用のグラブメーカーを立ち上げた。これまでに培った野球経験を生かし、体の使い方に特化したグラブを販売している。

「野球スクールが当たり前のような感覚で習い事の1つとしてやってくれる人間が増えると野球界が盛り上がると思う」。この信念の下、無限の可能性を秘めた原石たちに野球を教えることで今後の野球界の発展に貢献する。

生島の野球経歴

96 年	野球を始める
05 年	大阪桐蔭高校に入学
08 年	同志社大学に入学
10 年	春季・秋季リーグ優勝 関西選抜アメリカ遠征
11 年	春季・秋季リーグ優勝
12 年	西濃運輸硬式野球部に入部 東海選抜に選出
14 年	第 85 回都市対抗野球大会優勝 社会人野球日本代表に選出、 フランス国際大会出場
18 年	現役引退

レイアウト 小島葵

きょうと報知に同志社アトム参上
京都府のスポーツ情報満載のきょうと報知は、毎月1回、スポーツ報知（宅配・コンビニ販売分）に折り込まれます。
次回は5月26日(金)発行予定です。
※写真は3・4月号です。

私たちは大学部活動を応援しています。
STAR FORM
starform.jp

ビラ掲載専用新アカウント
atom_doshisha_
できました！